

〔紹介〕

木宮泰彦著『日本喫茶史』

中野直樹

本書は日本の茶に関する概説を行ったものである。百四十ページほどのコンパクトな本でありながら、古代から近世まで日本で茶がどのように扱われ、飲まれていたのか、概要をよく理解できる。また、内容の記述は各時代に目配りがされている。著者の木宮泰彦氏の著作は日本史の流れを踏まえた著作が多いが、本書もまたその特徴を有している。

本書の章立てでは以下の通り()内は開始ページ。また、字体は通行のものに直した。以下同じ¹⁾。

総節(2)

一 栄西禪師以前の喫茶(15)

喫茶の起源、朝儀と茶、嵯峨天皇と茶

二 栄西禪師と喫茶養生記(25)

栄西茶種を伝ふ、喫茶養生記

三 茶寄合と茶会(37)

茶寄合、唐様の茶会、点心、茶亭、茶亭の設備、点茶、茶礼後の飲宴

四 茶の湯の成立(55)

茶の湯の名義、成立の時期

五 茶道の発達(64)

喫茶の普及、足利義政と三阿弥、村田珠光、銀閣の東求

堂、茶の湯の流行、茶人の輩出、武野紹鷗

六 織田信長と茶道(88)

名器の蒐集、茶器による行賞、茶の湯

七 豊臣秀吉と茶道(103)

秀吉と茶湯、千代の松原の茶会、北野の大茶湯、千宗易

八 茶道の諸流派(129)

茶道の分派、千家流と宗偏流、織部流と遠州流、石州流

、其他の諸流派

総説には「茶はまことに人生のオアシスである」(p2)

という印象的な文章があり、続いて「茶の歴史は、正しく日本文化史の重要な一面をなすべきものである」として、茶の歴史を日本の文化史として位置付ける(p.14)。そして、「我が国の喫茶は、薬用に始まり、遊戯に転じ、藝術に醇化せられて、然る後日常の飲料にまで普及した」という(p.15)。上記喫茶の四段階で本書は喫茶史を述べる。ほかに総説には、近世期頃の俳句や漢詩に見られる茶の表現を列挙する箇所もあり、文学においても茶が重要な位置を占めていたことが分かる。

一「栄西禅師以前の喫茶」では、奈良時代以前から始まった薬用としての喫茶について述べ、正倉院文書等に見える茶の記事を紹介する。平安時代には茶に関する記事が増加するが、平安時代も当時の文献の記述からするとほとんどの場合薬として用いられたと考えられることを述べる。

続いて、二「栄西禅師と喫茶養生記」は、一旦すたれた喫茶が、栄西の将来により、再び盛んになることを説く。著者は栄西を「本邦喫茶史最大の功労者」という(p.25)。栄西にとって、喫茶の目的は眠気覚ましであり、養生である(p.28)。栄西の著述は多数あるが、仏教的な著作でないものとして『喫茶養生記』がある。これは茶に関する我が国最古の資料となっている。

三「茶寄合と茶会」では、鎌倉時代末期から室町時代に

かけて、中国から日本へ茶会が伝わり、この茶会が、後の茶の湯につながるということが述べられる。鎌倉末期、茶は遊戯の場に供されるようになり、茶寄合として囲碁や連歌などの場で飲まれ、後にかけて事とも結びついたが、ほかに唐土風の喫茶の場もあったことが指摘される。唐土風の茶会は大人数で行われ華美さをよしとし、享楽的な要素があったが、茶の湯は閑寂清雅を旨としており、趣は異なっている。しかし、次第などが類似することから、茶の湯は唐土風の茶会が日本化したものと見る。

四「茶の湯の成立」では、鎌倉時代末から南北朝時代にかけて専ら遊戯享楽のために使われた茶会が、室町時代に入って茶の湯として風雅の道にまで高められたことについて、指摘する(p.31)。茶会と茶の湯は異なる性格を持つとはいえず、禅という共通点もある。室町時代に入ると、茶のたしなみは遊戯としてではなく「茶の湯」という文化となった。茶の湯の成立の時期は、明確にはしにくいが一兼良の著作かとされる『酒食論』にはしずかに遊ぶ茶の会とあるので、文明期(1469-1486)には茶会から茶の湯への変化の途上にあっただらしい。その開祖については、古くから諸説あり、無窓国師説・顕弁上人説・足利義政説・千利休説がある。

五「茶道の発達」では、茶会や茶の湯が上流階級の少数

の人々にだけ普及した同時期に、大衆には喫茶の習慣が普及していたことを指摘する (p.64)。また、茶の湯を発達させた人物に、足利義政、三阿彌、村田珠光、武野紹鷗、その他の茶人を挙げて紹介する。

六「織田信長と茶道」では、織田信長が武將や政治家としてでなく、趣味の人として描かれる。信長は近世三百年間の風流趣味の素地を作ったのであった。しかし、趣味の人としての側面は、足利義政のように知られていない。(p.88)。信長は名器を集め、褒美として諸將に与えた (p.95)。信長のおかげで茶道が流行し、千利休という名人が登場し、近代風雅の源をなすに至ったのである (p.102)。茶道の流行は宣教師の注意を引いたようで、『日本西教史』²に記述が見える。

七「豊臣秀吉と茶道」では、秀吉は信長と同じように、茶事を数寄としたしなむのみならず、政策的に利用して経世の手段としたのだという (p.103)。茶会と茶の湯が並存している様子が、p.104の記述にも表れている。木宮の記述は、秀吉の開催した千代の松原の茶会と、北野の大茶湯とに及ぶ。そして、千利休 (千宗易) について紙幅を割いて解説する (p.117-128)。茶道の古式を改め、侘び寂びを主張する茶の湯を完成させたのは宗易である。

八「茶道の諸流派」では、「徳川氏の初世になっては、

千家の流のみがひとり栄え、(中略) 茶道の宗匠と称するものは、いづれも千家の流を汲まざるはなかった」という (p.129)。木宮は p.130 に、「千利休に始まる茶道の諸流派の系譜を載せる。

以上、本書の内容を簡単に紹介した。現在では、茶に関する書籍は多数出ており、近年出版されたものも多いので、本書の内容の記述は古くなっている部分もあるものと思われる。しかし、1940年にまとめられた茶に関する概説資料として、喫茶史研究の一里塚としての価値は十分にあると思われる。

【付記】

本稿は、2023年度常葉大学共同研究費 (代表: 若松大祐) による研究成果の一部です。本稿には、共同研究会で用いた若松大祐氏、濱川栄氏のレジユメを参照しました。記して感謝申し上げます。

注

1 本書は国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1687538>) から閲覧可能である。

2 但しこの本は近代に邦訳出版されたもの。もとはジャン・クラセ著『日本教会史』で1689年刊行。

(富山房(富山房百科文庫第119)、一九四〇年十月、百四十頁、五十銭(当時))

(なかの・なおき 本学教員)